

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	中国における武者小路実篤「桃源にて」の受容：田漢訳「桃花源」とその上海公演をめぐって
Author(s)	林, 涛
Citation	国文学攷, 242 : 1 - 13
Issue Date	2019-06-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049725">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049725</a>
Right	Copyright (c) 2019 by Author
Relation	



# 中国における武者小路実篤「桃源にて」の受容

## — 田漢訳「桃花源」とその上海公演をめぐる —

林 涛

### 1、はじめに

1910年代末から1940年代の初めにかけて、魯迅訳の「ある青年の夢」を始め、武者小路実篤の戯曲は多く中国語訳された。ただし、そのなかで正式に公演されたのは、「桃源にて」に限定される<sup>(1)</sup>。

「桃源にて」は、1923年9月発行の『改造』5巻9号に掲載され、翌年の2月に東京麻布南座で帝劇女優劇にて初演された。それをめぐる日本での同時代評には、戯曲について、会話の面でそれなりのよさがあったけれども、思想の説明では「あまりに簡単に浅薄な教訓的な意図」であり、実篤の「人生観相の解決」を示す「理詰戯曲」の一つと断定していた<sup>(2)</sup>。一方、上演については、「三幕三場とも装飾的な平面描写で色も線も比較的に大まかなもの」<sup>(3)</sup>であり、道具も甚だ「窮屈」、「何だか散漫でひき締まらない」<sup>(4)</sup>と評価されている。男役の守田勘弥が「八九分通り成功した」ほか、「音羽兼子の少女は別にとりたてゝいう程のこともない。介十郎の王様は爛漫たる桃花に対しても何の感激もなさうだった」、「あれでは、桃花を離宮に賞するよりも薪にでもしそうな物質主義の人間のように無味乾燥できがぬけていた」<sup>(5)</sup>といった、舞台装置や俳優の演技に対する酷評も見られる。この戯曲の上演は、関東大震災が起こって間もない時期にあたり、桃源復興についての話であったため、かなり話題を呼んだものにもなっていたことが、論文「架橋としての桃源境思想—関東大震災から現代—」<sup>(6)</sup>に示されている。

一方、中国において、「桃源にて」は日本での発表からわずか一年後の1924年11月に、「桃花源」として田漢によって翻訳され、上海『醒獅週報』の副刊『文藝』第5～7号に掲載された。その後、この中国語訳は閻哲吾に再翻訳され、『民衆教育通訊』(1931)に、さらに阿英(鷹隼、魏如晦)に改作され『申報』(1938)に掲載された<sup>(7)</sup>。そのうち、田漢訳の「桃花源」は辛酉学社愛美的劇団(1927・1930)および南国劇社(1931)により公演され、さらに阿英改作の「桃花源」は大鐘劇社(1940)により公演された。これらの翻訳、改作および公演の実態を考察し明らかにすることは、武者小路実篤文学における「桃源にて」の位置づけの議論や、中国近代話劇成立史における日本戯曲受容の在り方を解明するうえでも重要であろう。しかしながら、これまでの研究では、田漢、阿英および「辛酉劇社」を研究する際の題材としてしか用いられず、作品を紹介する程度であった。そこで、本研

究では田漢訳ならびに阿英改作の「桃花源」とその公演を対象に中国における「桃源にて」の受容の在り方を明らかにする。本稿では前者について論述し、後者については稿を改める。なお、南国社による上演は内部の練習であったため、対象としない。

## 2、公演の基本情報

『申報』に掲載された広告より、田漢訳「桃花源」の公演について、以下のような基本情報がわかる<sup>(8)</sup>。

演目：桃花源（三幕名劇）

劇団：辛酉学社愛美的劇団

公演回数：第五回<sup>(9)</sup>

著者：武者小路実篤

訳者：田漢

日時：1927年12月26日午後3時と8時（一回目）

1927年12月31日午後3時と8時（二回目）

1928年1月2日午後3時と8時（三回目）

場所：上海四川路基督教青年会会堂

券価：定座一元 普通小洋六角 学生優待有

なお、上記に加えて同劇は「難劇運動」における難劇の一つとして、1930年6月8日にも上海中央大会堂で一回上演された。もっとも、「難劇運動」とは、社会的意味における「運動」ではなく、「辛酉学社愛美的劇団」が催した難しい戯曲の上演実験として理解されるべきであるのだが、これを含めると田漢訳の「桃花源」は辛酉学社愛美的劇団より計四回上演されたことになる。ここでまず、そもそも「辛酉学社愛美的劇団」とは何かについて簡潔に紹介しよう。

1920年代は中国近代劇の草創期にあたり、その頃の上海では、ほとんど個人の趣味で集まった「愛美的」（英語のAmateurの音訳で、アマチュアの意）劇団が数多く活躍していた。なかでも、朱穰丞が主宰する「辛酉学社愛美的劇団」は、1924年の冬頃に「辛酉学社」（1921）の新劇部から脱胎、成立したもので、田漢が主宰する「南国社」、洪深が主宰する「復旦劇社」、応雲衛が主宰する「戲劇協社」と並んで名高いものとして挙げられる。一般的に「辛酉劇社」と略称されており、本稿でもこれを採用する。

辛酉劇社は、幹事兼舞台監督の朱穰丞の出国（1931）をもって終焉を迎えるが、六年間で公演を六回、「難劇運動」を一回行った。その公演の時期や演目などの情報については、ほぼ以下の通り整理できる<sup>(10)</sup>。

表 辛酉劇社公演状況

公演回数・年月日	演目	著者／訳者
第一回 1925. 2	新人的生活	熊佛西著
第二回 1925. 4	虎去狼來	陳大悲著
第三回 1926. 11	獲虎之夜	田漢著
	親愛的丈夫	丁西林編著
	酒後	凌叔華小説／丁西林編著
	父歸（日本）	菊池寛著／田漢訳
第四回 1927. 12	桃花源（日本）	武者小路実篤著／田漢訳
第五回 1929. 5	狗的跳舞（ロシア）	アンドレーエフ著／朱穰丞訳
第六回 1930. 5	文舅舅（ロシア）	チェーホフ著／朱穰丞訳
難劇運動 1930. 5. 31 ／ 6. 7 ／ 6. 8	文舅舅、狗的跳舞、桃花源	

また、「桃花源」公演については「この教訓的な演劇は、辛酉内部の同志の気持ちを奮い起こしただけでなく、観客たちの精神をも高揚させた」<sup>(11)</sup>、「今回辛酉劇社による桃花源公演は芸術的な成功を収めたと思われる。」<sup>(12)</sup>といった反応が劇団内外で見られることから、辛酉劇社の全演目のなかでもさほど悪くない評価を得ていたようである。

演劇の三要素は、戯曲・俳優・観客であると言われる。次は、これらの方面から田漢訳「桃花源」の公演実態に関する考察を通して、実篤「桃源にて」の受容のされ方を明らかにする。

### 3、田漢訳「桃花源」について

#### 3－1 「桃源にて」に見る実篤の「情熱」と田漢

原作「桃源にて」と比較すると、田漢訳の「桃花源」は原作にたいへん忠実な作品である。戯曲は三幕からなり、その組立は、「所・中国／時・古代／人物・男子、少年（後に武官）、少女（後に武官の妻）、老人、その他」と設定されている。内容は分かりやすく、次のように構成されている。第一幕では、物語は美しい桃の花が咲く桃源にて展開される。ここ桃源は、主人公の男が一人で二十三年間苦心して創りあげたものである。ある日、彼とその弟が語り合っていたところに少女が逃げてくる。弟は少女を匿うが、あらくれ男が現れ、居場所を白状せねば桃の木を残らず切ると言う。木を大切に思う兄と少女の命が大事な弟との間で、少女の行方を明かすか否かをめぐり緊迫したやりとりがなされる。だが結局、桃の木は切り倒されてしまう。第二幕では、時は翌年の春に移り、主人公の男が荒涼たる桃源で一人川釣りをしている。そこへ老人が現われ、桃の切り株に生えた小さな芽を指し、その生命に固執すべきだと教える。男は老人の話と桃の芽の美しさに元気を取り戻し、桃の芽を眺め、「この美しさ、私もお前に負けないよ」と呟く。第三幕では、さらに十五年

経ち、老人・立派な武官となった弟・その妻となった第一幕の少女が、荒廃前よりもいっそう美しくなった桃源に戻ってくる。みな桃源の復活を心から喜び、祝杯を挙げて幕が閉じる。

内容においては、第一幕は起承転結があり、波瀾と緊張に富むものと言える。それに対し、第二幕は老人と男だけの対話劇となり、説教的な印象を受ける。第三幕は劇の展開に抑揚がなく、ハッピーエンドのシーンを見せるだけである。また、戯曲全体の構成から見れば、桃源の建設から復興に至るまでの途上に、男は思いがけぬ運命に押し込まれる展開が見られるが、三幕の構成の割合はほぼ3:1:1であり、バランスが悪い作品のようにも思える。ここで、なぜ田漢が完璧な作品と言えない戯曲を翻訳したのだろう、という疑問が生じてくる。

田漢の初期戯曲創作は、外国の戯曲翻訳とともに生まれたものである。その翻訳活動は、ワイルドの「サロメ」(1921)をはじめ、1933年までの間に計17点に及ぶ。なかでも菊池寛、武者小路実篤、山本有三、中村吉蔵、小山内薫、秋田雨雀、金子洋文など日本の作品が11点を占めている<sup>(13)</sup>。田漢のこうした戯曲翻訳は、もちろん彼個人の趣味や学識にもよるが、時代の要請に応えたものであろうとも推察される。新文化運動が盛んであった雰囲気なかで、中国では「旧劇」が厳しく批判された。そこで、西洋の演劇に学べと、宋春舫、茅盾などが詳細な書目を紹介してまで戯曲翻訳を呼びかけた<sup>(14)</sup>。田漢の戯曲翻訳は、まずイギリスの作品から始まったが、西洋のは古典戯曲だったのに対して、日本戯曲の対象はすべて同時代のものであることに特徴がみられる。この選択に、田漢のある種の動機付けが伺えないわけでもない。日本でも誕生したばかりで、悪戦苦闘する「新劇」の成立過程<sup>(15)</sup>を目にしてきた田漢は、文化も習慣も異なる西洋のものより、同じ東洋文化圏に属する日本のそれが、より中国の現状に適するのではないかと考えたのであろう。周知のように、叔父であり、のちに義理の父親ともなった易梅園を介して、田漢は「少年中国学会」成立初期にその会員となった。彼の理想とする「少年中国」の実現は、即ち小谷一郎が指摘したように、新文学、言い換えれば「新浪漫主義」芸術の建設を通じて叶うものである<sup>(16)</sup>。

もちろん、「桃源にて」もこうした田漢の発想のもとで翻訳されたものと言える。ただし、より具体的な理由を探りたいが、現段階では直接この作に触れた田漢の記録が見当たらない。しかしながら、田漢の様々な発言を洗い出してみると、少なからず「桃源にて」に関連する言葉や作品自体の持つ「魔力」というものが垣間見えるように思う。

「桃花源」が発表された1924年は田漢訳の『菊池寛劇選』が出版された年でもある。後者に関する「序」のなかで、田漢は実篤について次のように言っている。

武者小路が『白樺』派を代表するのと同じように、菊池は『新思潮』の同人を代表する。

菊池は理知を以て勝るが、武者小路は情熱を以て勝る。<sup>(17)</sup>

これは明らかに、田漢が菊池文学の特徴を批評する際に武者小路文学を比較対象とした

発言である。あえて、目下の翻訳に取り組んでいる「桃源にて」などを思い出しつつ述べていると言ってもよいだろう。また、田漢の、実篤に関する次のようなエピソードも残されている。

田漢先生に日本語を教わったのは数年前のことだった。半年が経って、先生がこの本（「その妹」——筆者注）を推薦してくださった。日本近代文学界においては武者小路実篤の影響が最も大きく、この戯曲の芸術的価値が「ある青年の夢」をはるかに超えているとおっしゃった。（略）授業以外に自分はよく復習し（略）、時には広次、時には静子のために涙を流す。ああ、文芸の人を感じることは蓋しこの如く！（略）その後毎日翻訳し、ついに約二ヶ月かけて仕上げた。<sup>(18)</sup>

これは訳者および田漢の教え子でもある周白棣が、中国語訳『妹妹』の「譯者贅言」に記した話である。田漢が薦めた実篤のこの戯曲の内容は、略述すれば、戦争で目が見えなくなった天才画家広次が、それに追い打ちをかけるように様々な不運に見舞われ、ついには最愛の妹静子をも失って不幸のどん底に陥る物語である。しかし、山田檳榔の同時代批評には「主人公の広次が絶大の勇氣を以て頑強に運命の力と闘つてゆく、その凛々しい、而かも悽愴な戦闘の生活を写してある。」<sup>(19)</sup>とあるように、「その妹」においては、芸術生活と現実生活が衝突する逆境のなかで、必死に生き抜こうとする主人公の生命力というものを実によく表出されている。田漢が「その妹」を高く評価していた理由は、彼が非常に感銘を受けたとされる作品「沈鐘」についての発言から探ることができる。「芸術生活と現実生活の衝突の悲劇」を描きながら、そこに「悲しみや喜びを超越した一つの美の世界を形成した」と言い、それこそが「Neo-Romanticismの本領」なのだと郭沫若に伝えている。それは田漢の言葉で言えば「新浪漫主義」の「生活を芸術化 Artification」する力であり、「人生を美化 Beautify」する力のことなのである<sup>(20)</sup>。この二つの作品は内容的には異なるが同工異曲の妙があり、田漢の「沈鐘」に対する評価は山田の「その妹」批評に通ずるものがある。要するに、田漢にとっての「芸術的価値」とは、何より主体の作家または創出された人物像にある「情熱」のことであり、「力」のことなのであろう。

### 3－2 田漢のなかの「桃源」＝「少年中国」の建設

「桃源にて」に、このような「情熱」と「力」に富む人物が表出されているのだろうか。これまでに第二、三幕に劇の展開が弱いことや、戯曲全体の構成が不均衡であることなどを指摘してきたが、この疑問に対しては、見事に表出されていると筆者は考える。

まず、寓意的な舞台設定と筋の運びにそれらを垣間見ることができる。舞台である桃源は、明らかに晋の陶淵明作の「桃花源記」から着想を得ている。しかし、溪流をさかのぼって道に迷い、桃林の奥に秦の戦乱を避けた人々の平和の郷を発見した武陵の漁師が、そこでたいそうなもてなしを受けて帰宅し、また訪ねようとするが、再び探し得なかったという伝説にあったように、原作は理想郷を発見する物語である。それに対して、「私はこの

仕事をやり出した以上は美しい上に美しくする。そしてこんなにも美しい桃の山を見たことはないと言う仙境をつくつて見る」という男の台詞にあるように、「桃源にて」はこの世に理想郷を建設するものと書き直されている。第一幕にある美しい桃源の建設に男は二十三年もかかった。そして第三幕にある、より美しい桃源の再建にまた十五年かかった。その間に、「自分の命よりも大事にする」桃の木がすべて切られ、桃源が荒れ果て、男は絶望してしまう。愛するもの、美しいものだからこそ、破壊される時の痛みが強いのだ。三十八年間の歲月つまりほぼ生涯をかけてその仕事に励む男の「情熱」と「力」が、こうして美しい桃源の破壊から復興に至る筋の運びを通して実によく表出されているのではなからうか。一方、「桃源にて」においては、桃源を漠然と「中国の山奥」とし、時を単に「昔」とし、人物の名前、容貌、衣装などについての描写も一切省かれている。それはほかでもなく、作品世界の具象性、事実性を取り除く意味を持っている。こうして、いつでもどこでといった条件を細かに決めてしまわない創作技法で、男の理想実現の「情熱」と「力」を鮮明に、そして力強く表出させようとしたのだらうと考えられる。

1923年という執筆時期からもわかるように、「桃源にて」は武者小路「新しき村」時代<sup>(21)</sup>の作品の一つである。「新しき村」とは、周知のように武者小路実篤が提唱した「人間らしく生きる」や「自己を生かす」社会の実現を目指して1918年宮崎県児湯郡木城村に創設した理想主義的共同体を指す。その運動は、当時多くの若者の支持を受けた一方、社会主義者たちからその桃源郷的な発想に対する根本的批判もあった。「桃源にて」は、まさにそうした状況を背景に、武者小路が理想実現のために悪戦苦闘してきた自分を「男」に重ねあわせ、そして「新しき村」を「桃源」に擬えて創出した作品であろう。そのためでもあったのだろうか、武者小路自身、後に全集のあとがき<sup>(22)</sup>で、「少し簡単だが、嫌ひなものではない」と述べている。

一方、田漢のほうは、日本留学の時期(1916-1922)と「桃源にて」の翻訳前後が「新しき村」運動の全盛時代とほぼ重なっている。周作人などの紹介<sup>(23)</sup>や「少年中国学会」を通じて、田漢は「新しき村」のことを知っていただけでなく、なんらかの形でそれと関わりを持っていたとも思われる。武者小路にとっての「桃源」＝「新しき村」建設は、田漢にとっては即ち「桃源」＝「少年中国」建設のことになるとは言えないだろうか。ただし、指導思想として、個人の成長が人類の成長へと繋がっていく武者小路の「新しき村」の精神に対して、田漢が提唱したのは個人の自覚が社会の改造に結びつく「新浪漫主義」文学の建設である<sup>(24)</sup>。もっとも、「桃源にて」が翻訳された1924年、日本では武者小路が離村したことで「新しき村」運動が次第に下火になり、中国でも内部思想の分裂などにより、田漢が加入している「少年中国学会」が解散の窮地に立たされていた。ところが、「孫悟空、お前はまだ若いのだ。しかし人々のよろこぶ人間になれよ。お前のもつ貴い力をもつて真理の為に働け」という仏の論しにあるように、同じく「新しき村」精神を反映した「仏陀と孫悟空」<sup>(25)</sup>の翻訳(1925)や、「新しき村」の素材を取り扱った映画脚本『民間へ』<sup>(26)</sup>(1926)

の創作などから見れば、「新しき村」運動の田漢への影響が、少なくとも村成立の最初から十余年の間、程度の差があるけれども続いていたのだろうと考えられる。なお、田漢の年譜からわかるように、「桃源にて」が翻訳された1924年というのは、愛妻易漱瑜の病気が悪化し、夫婦で創刊した『南国月刊』も4期をもってついに停刊に追いやられた年でもある。要するに、この頃の田漢にとって、公私ともに「情熱」と「力」を求めていたのである。興味深いことに、『醒獅週報』に掲載された訳作「桃花源」には、多くの小さな「○」が付いた訳文が非常に目立つ。そのほんの一部を、原文付きで並べてみよう。

男子：在我夢中燦爛着的世界比這個世界還不知要美多麼倍。我想再把十年二十年的功夫，在什麼人都不知道的中間造出大眾的歡喜來。（第一幕）

原文：私の夢の内に咲いてゐる世界はこの世界より何倍美しいかも知れない。もう十年か、二十年、私は、誰れにも知られずに、人々のよこびをつくっておきたい。

老人：怎麼樣也無力禁止的時候，使得咬緊牙關忍受，祇把自己所能做的事百折不迴的做去，這便是男子的事業。（第二幕）

原文：とめる力がどうしてもない内は、それは甘んじてそして自分のすることだけを執念深くするのが、男子の仕事じゃないかね。

男子：能做到那一步，總得做到那一步。無論什麼事來也不要怕他。大家前進罷。我到我死的那天為止，竭力把這個山弄成一所仙境。你也向着你所信的那方奮鬥起去。（第三幕）

原文：やる所までやつて見るだけだ。何事が出来ても恐れないで、お互いに進んで行かう。私は死ぬまでこの山を美しくするだらう。お前は、お前の信じた方にゆけ。

「○」はたいへん感銘を受けた内容に田漢が自ら付けたものである。正しくは、感銘を受けたというよりも、これらの言葉を借りて田漢自身が「少年中国」を建設しようと高らかに呼びかけ、同時にその実現のために現在苦闘している、自分を含めた多くの中国知識人に「力」を持とう、というような勇気付けのメッセージにもなっていたのではないだろうか。

他にも、辛酉劇社がこの田漢訳の「桃花源」を公演の対象に選んだ理由を探ることができる。

辛酉劇社の中核俳優で、後に『馬路天使』の監督ともなる著名映画人袁牧之の話によると、実は「桃花源」前の第三回公演と深く関わりがあったようである。その公演は、四つの一幕ものが取り扱われており、俳優の数も以前の十人以下から二十三人に増員され、かなり意気込みのあるものとして三週間も上演され続けた。しかし、演劇界外部から、とりわけ「父歸」はたいへん好評を得たものの、真の演劇愛好者にしか注目されず、経済面的では依然として大きな損失となり、個人の生活にまで影響を及ぼしたという。一方この頃、郁達夫の「沈淪」、田漢の「咖啡店之一夜」といった類廃小説や戯曲が大流行し、劇団員たちもその影響を受け、ややもすると感傷的情調に陥り、よく北四川路にあった「上海咖啡」で物思いに耽った。典型的な例は、新しく加入した袁倫仁が「沈淪」に傾倒し、第四回公



演の際に名の「倫仁」を「淪仁」に変えてしまったことである。このような状況下、演劇の仕事もほぼ停滞してしまった。そこで、幹事の朱穰丞は教訓的意味の強い「桃花源」を上演脚本とし、次の公演に取り組んだのだという。そのうえ、公演が行われるほぼ一ヶ月前、雑誌『幻洲』に「彼ら（辛酉劇社）は十二月二十六日に武者小路実篤著作の〈桃花源〉を公演する予定である。これは田漢によって翻訳され、人生を前向きに歩くことを描出した素晴らしい戯曲である。人生的芸術を愛好する同志の皆様は、ぜひとも二十六日に北四路青年会へご鑑賞ください。」<sup>(27)</sup> といった「公演広告」が掲げられた。なお、「難劇運動」が行われた際の、「文舅舅」「狗的跳舞」「桃花源」という上演順序の配置から見ても、明らかに「絶望から希望へ、希望から情熱へ」<sup>(28)</sup> という意図が見られる。

こうして見れば、辛酉劇社の戯曲「桃花源」選択も訳者の田漢と同じく、やはり新しいものを建設するという寓意的な意味、および「男」が象徴する「情熱」と「力」にあったのであろう。もっとも、実際の効果を見れば、「この教訓的な演劇は、辛酉内部の同志の気持を奮い起こしただけではなく、観客たちの精神をも高揚させた」<sup>(29)</sup> と袁牧之が言っている。ところで、当時の観客たちが一体どのように「桃花源」の舞台を受け容れていたのかは、同時代の言説に依拠する以外に判断できない。以下、演劇の内容、俳優の演技、舞台装置、音楽効果などの視点からそれをめぐって考察する。

#### 4、「桃花源」の舞台をめぐる

「桃花源」の公演時期や場所については前述した。ここでは舞台の基本情報を示す。舞台監督／朱穰丞、舞台装置／葉靈鳳、俳優／桃仙（袁牧之）、少女（唐佩英）、少年・武官（袁淪仁）、老人（郁瘦梅）、参加者（唐遠藩）。また、1927年12月26日一回目の上演の観客には、田漢、郁達夫、高長虹、洪深、歐陽予倩、唐槐秋など知識人の名が挙げられる。

まず、演劇全体の内容を概観する。限られた資料のなかで、「一方、（桃仙の考えは）人生経歴の浅いものには理解し難いものだし、劇全体の雰囲気もまた余りにも陰鬱なので、一般の観客たちには喜ばれなかった」<sup>(30)</sup> と洪深に指摘されたように、「教訓的な語句で人生を語るものだが、筋としては頗る簡単かつ平淡なものだった。（中略）桃仙は主役のくせに、戦場に風雲を巻き起こす英雄でもなければ、恋愛に失意したヒーローでもない。なおさら社会の改革に身を奉げる偉大な人物でもない。自分の仕事のみに専念する男なのだ。挫折に遭った時から、激励されて立ち直るまでの途中における主人公の心理的な揺れをよく表出したが、台詞のほうは甘く艶っぽくもなければ、別にユーモアなものでも滑稽なものでもない。故にその表情、しぐさの表出は如何に困難なことか、想像に難くない。」<sup>(31)</sup> とややマイナス的な批評が見られる。しかし、他方では袁牧之が指摘したように、「桃花源」の象徴的な意味に感動させられた人も少なくない。次の引用は「静」と称される観客がそうした感想を「観桃花源記」にて述べたものである。

最も印象深かったのは、桃仙がいくら挫折に遭ってもめげないその精神だった。感心のあまり、自ずからそれが励ましものとなる。もしかしたら、自分と同じように感じる客も多いだろう。もしそうなら、ここで桃花源、いや武者小路実篤の苦心に感謝の意を表さなければならない。(中略)精神がひどく麻痺しているこの世の中で、桃花源は誠に一服の興奮剤で、若者たちを奮い起こし、はっきりとした目標に向かわせるだろう。(くしょげるのは男子として恥だ)、(人間は死んでしまへば別だ。生きてゐる間は何かしよとしなければいけない)、(自分のするだけのことを執念深くするのが、男子の仕事だ)といった台詞はなんて意味深く、力強いのだろう。昏睡中あるいは迷子の若者たちよ、自分の道を見定め前向きに進もう。<sup>(32)</sup>

「難劇」の一つとして上演された後も、「(この演劇は)人生の真理とは何かを知らせ、惰性的な民族性から目を覚まさせ、胸を張って大胆に光明たる人生に向かって歩こうと我々を激励するものである」<sup>(33)</sup>と褒め称えていた。

次に、俳優の演技について示す。「王」役を除き、配役についても「淪仁君は少年の閑雅さと武官の英気ぶり、郁瘦梅は癖のある老人の性格をよく表現できている。なお、四人のあらくれ男の凶悪さも俳優たちはじつにうまく演じられていて、評価すべきものだ」<sup>(34)</sup>と、ほぼ全面的に肯定していた。さらに、少女役の唐佩英については「第一幕であらくれ男に追われて転んだ時の仕草が非常に柔らかで、第三幕で武官に伴って桃仙に会った時に見せたあの照れくさい表情もかなり気に入るものだった」<sup>(35)</sup>といったその好評をしている。今日の目から見れば、唐佩英のそのような演技はさほど評価するものでもなさそうだが、しかし男女共演がまだ先駆的だと見られていた当時においては、男優の女装よりなめらかだと評するのもうなずける。

ところで、俳優の演技と言え、誰よりも主人公役の袁牧之は、次の引用からもわかるように一様に観客たちに絶賛された。

俳優について、私の目から見て桃仙役の袁君は最も印象深く、氏の名前、いやすべてを忘れさせるほどすっかり桃仙になり切っている。桃の木が切られた時の彼の顔の表情は、涙をするほどに訴えかけてくるものがあった。<sup>(36)</sup>

袁君は台詞を読み込み、始終言い違えたものがない。声に通っているだけでなく、しぐさも穏やかなものである。そのきめ細やかな表情は、桃仙の心理変化をじつにうまく捉えている。<sup>(37)</sup>

なお、一般の観客だけではなく、演劇専門家の洪深からも袁牧之の演技とその化粧について、次のように高く評価されている。

〈桃痴〉役の袁君は、その声にしても容貌にしても老人らしく見える。著者や訳者の言おうとするものは、彼の口から発せられる台詞によってじつに完璧に表現されている。その声は真摯かつ沈痛なもので、観客の心に強く訴えていくのだ。幕が開いて間もない時は、彼が誰だか知らず、訓練を受けたことのある演劇の天才だと思わな

かった。たいへん意外なことだと思ったから、何回も舞台裏へ行った。しかし、声をかけるのは控えた。幕が閉じ、化粧を落とした後の彼を見てみたら、十何歳の子供だということに気がついたのだ。<sup>(38)</sup>

袁牧之（1909-1978）は、浙江省寧波の生まれで、幼少の頃から文明劇が好きであり、十三歳の時に上海に辿りつき、最初は洪深が發起人の戯劇協会に入り端役をしていたが、辛酉劇社の第三回公演の際には同社の一員となる。「桃花源」の公演において袁牧之が大いに光彩を放ったのは、もちろん洪深の称賛するその決め細やかな演技と達者な化粧術にも由来するが、役に対する精緻な造形、その造形はまた作品や人物について十分に理解した上でされたものだったということに、より深い理由があったのではないと思われる。「桃花源」に出演するために、袁牧之は自ら田舎まで足を運んで農民の生活を観察・体験したという。<sup>(39)</sup> よって、彼の演技はより現実近く、一味に台詞を吐き出すことを本領とする時流と一線を画し、独特な特徴を見せたのであろう。

さらに舞台装置と音楽の採用については、次のような同時代の言説がうかがえる。

青年会の小さい舞台に、なんと山と泉のほかには籬や茅屋、木の根や石階段までも設けてある。そして、門と四本の路の辺りにはもっぱら桃の花が咲いている。<sup>(40)</sup>

舞台装置はすこぶるスケールの大きいものであった。高低に起伏する丘々のほかに、桃の木も満遍なく配置されていた。花の色とライトの光が相映じて、我々観客たちはまるで桃源にいるような気がしてならない。<sup>(41)</sup>

演劇にとって音楽は元来より（演出の）助けとなるものだが、京劇のような内容と関係ない騒々しいもの以外、今までの中国演劇界においては取り入れられたことはまだなかった。今回の「桃花源」に音楽を取り入れたことは、まことに新紀元への扉を開いたものだ。第三幕で祝宴が始まる時に、その雰囲気合った和やかな音楽がゆっくり流れてきたことで、祝賀する気分がますます高まり、観客たちも俳優たちもみな別天地である桃源に酔い耽っただろう。<sup>(42)</sup>

近代演劇（話劇）に音楽を取り入れることが「桃花源」の公演に始まったのかどうかについてはいっそうの考証が必要であるが、要するに、以上の言説から、「桃花源」公演の舞台装置と音楽採用についてたいへん評判がよかったということは明らかである。

なお、『申報』に載っている広告を見てもわかるように、「目下中国演劇の趨勢を知りたければ、辛酉学社愛美的劇団の再演する武者小路実篤著、田漢訳の三幕名劇〈桃花源〉を見よ。」<sup>(43)</sup> というような事前の宣伝、当時知識人たちがよく集まる内山書店での前売り券、学生向けの割引券販売、ないし公演の場所をそれまでと違う、わりと賑やかな町だった北四川路にある基督青年会にし、公演日を週末にするなどの戦略の実行も、大いに公演の成功に助力したと思われる。

## 5、おわりに

以上、田漢訳「桃花源」とその公演をめぐる考察を通じて、中国における武者小路実篤「桃源にて」の受容の在り方の一部を明らかにした。

田漢の翻訳にしても辛酉劇社の公演にしても、主たる選択理由は、原作に表出された、挫折にめげず桃源を建設し続ける主人公の「情熱」と「力」にあったと言える。それは田漢や辛酉劇社といった個人や団体にとって必要な選択だっただけでなく、翻訳や公演を通じて、苦難に直面していた当時の全中華民族へのメッセージでもあっただろう。また、田漢訳のこの戯曲は、三年後の辛酉劇社の公演によってさらに知られ、ある意味では日本以上に受容されたとも考えられる。それは、戯曲自体が持つその寓意的な意味に共感したことにも起因しているが、袁牧之をはじめとする俳優の高い演技力や化粧術、観客を幻の桃源の世界に誘い込む舞台装置および劇の内容に合わせた音楽の取り入れなどによるものでもあった。もっとも、「桃花源」はまた辛酉劇社上演の難劇の一つとして扱われたことから見て、前に洪深が指摘したとおり、知識人以外の一般民衆にはあまり受け容れられなかったことも事実である。しかし、あえて多くの困難を乗り越えて「文舅舅」「狗的跳舞」「桃花源」といった難しい象徴的心理劇を上演・実践したことによって、辛酉劇社もそれなりの芸術探索の特徴を見せ、後に「千面人」とも褒め称えられた著名な演劇者、映画人ともなった袁牧之のような俳優を世に送り、男女共演の推進にも大いに貢献した。そうした試行錯誤の奮闘の歴史があったからこそ、短期間でありながらも、「愛美的」劇団の一つとして中国近代演劇（話劇）成立史上において一席を占め、そのなかで、田漢の訳を経た武者小路実篤「桃源にて」の上海公演も、それまでの演劇と違う舞台装置や内面の心理分析など近代的な要素を導入することによって、中国近代演劇生成の一助を担ったと考えられる。なお、後に田漢訳の「桃花源」について「訳文がやや硬い」<sup>(44)</sup>というややネガティブな指摘も見られるが、それは白話はまだ十分に成熟していなかった段階にて避けられない、即ち時代の問題であり、それに対して、この戯曲自体の生命力は主人公である「男」のように強く、それが1938年という時点に再び文学者の阿英を刺激し、「桃花源」改作の途とその公演にまで駆り立てたのである。

---

## 【注】

- (1) 関折梧の「田漢劇作年表補正」(『戲劇芸術』1980年第1号)によると、「その妹」(中国語訳『西家与其妹妹』)は上海藝大魚龍会で上演されていた。ただし、それが本格的な公演とは言えない。
- (2) 千葉亀雄「「桃源にて」を読む」(『演芸画報特集 南座の女優劇「桃源にて」研究』1924. 3. 11) pp. 2-6 参照。

- (3) 岡本帰一「『桃源にて』の舞台装置について」(『演芸画報特集 南座の女優劇「桃源にて」研究』1924.3.9) pp.9-11 参照。
- (4) 守田勘弥「『桃源にて』の上演感想」(『演芸画報特集 南座の女優劇「桃源にて」研究』1924.3.11) pp.11-12 参照。
- (5) 水守亀之助「『桃源にて』を見物して」(『演芸画報特集 南座の女優劇「桃源にて」研究』1924.3.6) pp.6-8 参照。
- (6) 大国真希、安藤公美、小島望、遠藤祐共著『福岡女学院大学紀要 人文学部編 第24号』2014.3)
- (7) 閻哲吾が改訳した「桃花源」は1931年『民衆教育通説』第1巻第6期に掲載、阿英の改作「桃花源」は初め『申報』(1938年10月15日～11月26日)に連載され、後にまた「風雨戯劇叢書」の一冊および「学校劇叢刊之一」として、それぞれ上海の風雨書屋(1938年)と亜星書店(1940年)より刊行された。亜星書店版のほうは1941年7月時点で4版ともなっていた。
- (8) 1927年12月25日第19版第19681期広告、この日の広告に「光華書局 文明書局 英明照相館 榮華照相館 毛全泰木器號 青年會 内山書店」で券の前売りがされたことが掲載されている。1927年12月26日第17版第19682期広告、1927年12月29日第21版第19685期広告、この日を含めて以降の広告(1927年12月31日第20版第19687期、1928年1月1日第43版第19688期)に「並有特別音楽加入」という宣伝文が記してある。1928年1月2日公演当日の『申報』が欠けているため確認できないが、広告の数が六回だったと推測できよう。
- (9) 今回『申報』や『幻洲』(2巻6号1927年12月2日p317)によって確かめた「桃花源」の上演回数は、これまで一般に流布してきた袁牧之の回想(第四回)と異なっている。
- (10) 袁牧之「辛酉学社愛美的劇団」、『矛盾』1934年第2巻第5期参照。
- (11) 注(10)に同じ。
- (12) 吳鴻綏「看了“桃花源”以後」、『申報』1927年12月31日。
- (13) 具体的に中国語訳された日本の戯曲作品は菊池寛の「海之勇者」、「屋上之狂人」(1922)、「父婦」、「温泉場小景」(1924)、武者小路実篤の「桃花源」(1924)、「仏陀與孫悟空」(1925)、山本有三の「嬰兒殺戮」(1928)、中村吉蔵の「無籍者」(1928)、小山内薫の「男人」(1928)、秋田雨雀の「甞着棺的人們」(1929)、金子洋文の「理髮師」である。なお、田漢の「サロメ」翻訳には、帝劇劇場活動を中心とする大正期の日本演劇状況からの影響が大きいと考えられる。
- (14) 宋春舫の『近世名戯百種』は胡適の推薦で『新青年』4巻3号、茅盾の推薦した書目は『文学週報』82、83期に掲載されている。
- (15) この詳細については『帝劇の五十年』(帝劇史編纂委員会編、東宝出版、1966年)等を参照。
- (16) 小谷一郎「創造社と少年中国学会・新人会：田漢の文学及び文学観を中心に」、『中国文化：研究と教育：漢文学会会報』38巻、大塚漢文学会、1980、pp.48-49 参照。
- (17) 「菊池寛劇選・序」、『田漢全集第14巻』p376。日本語訳と下線は筆者によるものである。以下同じ。
- (18) 「譯者贅言」、周白棣訳『妹妹』、中華書局出版、1925年。
- (19) 寺澤浩樹「武者小路実篤の研究——美と宗教の様式」、翰林書房、2010年6月。p.187
- (20) 田漢、郭沫若宛書簡(1920年2月29日)、『三葉集』所収、上海亜東図書館、1920年5月。なお、ここでの指摘は小谷一郎氏の論(注(16)参照)を踏まえたものである。
- (21) 1918年-1926年までの間。武者小路が村内会員として「新しき村」に住んでいた時代。
- (22) 新潮社版、第十七巻。
- (23) この点に関する詳しい事情は拙論「周作人と武者小路実篤」を参照されたい。『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第4号、日本開城出版社、1998年3月。

- (24) 田漢における【個人の自覚⇒社会の改造⇒「新浪漫主義」＝少年中国の新文学建設論】という図式に関して、小谷氏は既に前記注（16）の論文において指摘を行っている。
- (25) 『武者小路実篤全集』第六卷、小学館、1988年、p294。
- (26) 中国語題名は『到民間去』である。
- (27) 『幻洲』2巻6号、1927年12月2日、p317。
- (28) 「關於難劇運動的來函」、『申報』1930年6月17日。
- (29) 注（10）に同じ。p104。
- (30) 楊新宇「朱穰丞、袁牧之与辛酉劇社」、『新文学史料』、2012年第1号、p40。
- (31) 靜「觀桃花源記」、『申報』1927年12月31日。
- (32) 注（12）に同じ。
- (33) 椿森「关于“辛酉”」、『申報』1930年6月18日。
- (34) 注（31）に同じ。
- (35) 注（31）に同じ。
- (36) 注（12）に同じ。
- (37) 注（31）に同じ。
- (38) 洪深「大家努力種桃花（看了辛酉學社的桃花源以後）・下」、『明鏡』1928年1月5日。
- (39) C. L. T「演技試論」、夏瑜『陳鯉庭伝』、中国電影出版社2008年、p159。
- (40) 注（38）に同じ。
- (41) 注（31）に同じ。
- (42) 注（12）に同じ。
- (43) 『申報』1927年12月29日第21版第19685期広告。原文は「欲知現時中國戲劇之趨勢，看辛酉學社愛美的劇團（中略）複演武者小路實篤著 田漢譯三幕名劇桃花源。並有特別音樂加入。」となっている。
- (44) 1931年『民衆教育通訊』第1巻第6期に掲載された閻哲吾改作「桃花源」を参照。

なお、この論文は中国国家社会科学研究基金重大プロジェクト「近代以来中日文学関係研究と文献整理（1870-2000）」（17ZDA277）の段階的研究成果である。

一りん・とう、中国北京師範大学副教授一